報告

# 第５回国際根研究学会シンポジウム参加報告

飯嶋 盛雄（名古屋大学農学部）

日本の根研究会の全世界版ともいうべき国際根研究学会という組織がある。こちらは、2から４年ごとに学会を開くことが活動の中心となっており、日本版のような年４回のニューズレターもなければ、年会費もない、いたってシンプルな組織であった。しかし、今回の第５回国際根研究学会シンポジウムの最終日に行われたビジネスミーティングの席上で、重要な報告が３点なされた。それらは、１、年会費制を導入し学会誌を発刊する体制をつくっていくこと、２、第７回学会（６-８年後）の開催地として日本とイスラエルがノミネートされたこと、そして、３、ワークショップの結果をもとに根の命名法の統一と根のサンプリング時の最低調査項目の統一の素案が提出されたことである。３については、「農業及び園芸」誌の連載記事「植物の根に関する諸問題」に詳しい内容を報告する予定であるので、そちらを参考にしていただきたい。２については、日本の根研究会の会員が４００人近くもおり、ニューズレターの発行や研究会もアクティブに行っていることから、現会長のピアソン氏の方から打診があり会長の森田氏（今回、本人が知らない間に、国際根研究学会の副会長になってしまった）らが引き受けることを決断したという経緯である。これについても、詳しい内容については、本号の巻頭言にある国際根学会誘致の経緯を参照されたい。ちなみに、第１回学会は1982ウイーン（３名だけでの会合）、第２回1988スウエーデン、第３回1991ウイーン、第４回1994カザフスタンという経過で、第５回が今回の1996USA、第６回の候補地が1999オランダかスロバキアの予定である。１については、世界的に見ても根の研究が最近盛んになりつつあるようで、根学会が主導のRoot Scienceを展開していきたいとのことであった。学会誌を発行する場合の試算として年間200ページ規模の雑誌の場合、年会費４３ドルくらいで５０部の無料の別刷り提供とページチャージなしで運営可能になるということが説明された。ただし、会場からはさまざまな疑問の声があがっていた。例えば、フルタイムのエディターはボランティアでやっていけるのかという疑問から、その場合のコスト計算の問題、すでにさまざまな商業誌が根の研究の受け皿としてあるのに、本当に皆はこの学会誌に投稿するのかという疑問などである。なお、学会誌を発刊しない場合には、学会の維持費として、年間７ドル程度の会費になることも説明された。その場合には学生会費をどうするかという問題はある。国際根研究学会は、今後、単に学会を数年に一度開催するだけのものから、より活発なものへと脱皮しようとしている。その場合、いろいろな面で研究会会員４００名を擁する日本の組織は魅力的なのかもしれない。

第５回学会の内容にも触れないといけないので以下概要をお伝えする。開催地はフロリダ半島の北方にあるサウスカロナイ州のクレムソン大学であり、ここは、かのアトランタオリンピック会場から直線距離でわずか100マイル余り（170-180km）の距離にある。広大なアメリカ合衆国の感覚でいえば、まさに目と鼻の先であり、

しかも、開催期間（1996年 7月15日から18日まで）の最終日が、オリンピックの開幕式の前日にしてあるように、開催場所と期間をオリンピックに合わせた「参加することに意義がある」ような学会あるいはアメリカのサービス精神のたまもののような学会であり、参加者は100余名であった。しかし、主催者側の意図に反し、日本からの参加者はもとより、多くの海外組は、オリンピック見物を楽しむようなスケジュールを組んでおらず、むしろオリンピックのせいで、飛行機は混むは、落ちるは、という交通機関の混雑と、普段より厳しいセキュリティーチェックにうんざりした面もあったようだ。

シンポジウムのメインテーマは、Root Demographics（植物根の人口統計学？）であり、サブテーマとして、A: 地球規模の窒素循環、B: 耕地および非耕地生態系、C: 持続的な農環境システム、D: 地下水の品質、E: 遺伝・生理・分子生物学、F: 最近の根系動態の測定技術、の６つの課題を取り上げた。今回の学会全体の印象としては、おもに樹木や自然生態系の根系を扱っている研究者、あるいは耕地レベルの根の生態に視点をおいた研究を展開している研究者には比較的満足のいくものであったようだ。しかし、一年生の植物・作物を対象とした研究者、なかでも根の生理や形態と機能に重点を置いた研究者には今一つもの足りない学会であった。日本からの研究者からは、とくにシンポジウムの基調講演者の内容に対する不満があり、中には「来るんじゃなかった。」という怒りに満ちた感想をもたれた方もいた。たしかに、上記の内容を「基調講演」するには、手持ちのデータが少ない人が目立ち、教科書的の域をでない講演や、中身はあったのかどうかわからないが、やたらとジョークを連発し、Native speakerの間での和気あいあいとした雰囲気と非Nativeのむすっとした表情のギャップが大きな講演や、きわめつけは、根の話が全く出てこない講演もあった。基調講演に対する討論は、パネルディスカッションの形式がとられた。パネラーの中には興味深い視点を展開した方もみえたが、質問は全て質問用紙に書くという形式であり、フロアからの発言を封じたため、問題を掘り下げた、けんか腰の討論が全くなく、いまいちの感があった。基調講演の低調さに比べて、ポスター発表はそれなりに面白かった。個人的には、とくに最近の根系動態の測定技術に興味があり、ミニライゾトロンの最近の改良型タイプの発表や、Zobel氏の４種類の根の遺伝的相違点が、とくに印象に残っている。

学会終了後のエクスカーションでは、ジョージア大学のライゾトロン見学、ミニライゾトロンによる樹木の根の伸長解析プログラムの紹介、X線トモグラフィーによる根系生長の動態測定技法などを一日で見て回り、これで学会に参加したもとが取れたと感じた。なお、エクスカーション終了後、森田氏にくっついて、小柳氏ともどもアーカンソー大学のベイルーティー氏を訪問したのだが、土、日、月曜日の３日間で、水稲とダイズ・ワタなどの広大な田畑輪換圃場の見学を中心とした中身の濃い楽しい一時を過ごすことができた。学会よりもこちらの方がおもしろく、アメリカ合衆国まで行った甲斐があったと感じた。